資　料

幼児におけるネガティブではない泣きの直接観察事例の分類

― 保育者への質問紙調査から ―[1)]

和田由美子[2)]・井﨑美代[3)]

Classification of crying episodes in pre-school children in non-negative situations: A questionnaire survey for nursery and kindergarten teachers

Yumiko WADA・Miyo IZAKI

［要約］ネガティブではない泣きが幼児期から見られるか否か明らかにするために，保育者を対象に，ネガティブではないと思われる状況で幼児が泣いたエピソードについて，自由記述で回答を求めた。76名から得られたエピソードの内容を検討した結果，ネガティブではない泣きに該当すると判断されたエピソードは82件中33件，報告者数は76名中25名（32.9%）であった。泣きの生起状況の類似性に基づき，エピソードをKJ法で分類した結果，親が迎えや担任の出勤時に泣く＜愛着対象との再会＞が13件，自分または人が勝利・成功した時に泣く＜成功・勝利＞が11件，自分または他者が危機的な状況から解放された時に泣く＜危機からの解放＞が3件で，33件中27件（81.8%）がこの3つのカテゴリーに含まれた。エピソードの報告件数は，男児より女児で有意に多かった。大学生の回想から，幼児期にネガティブではない涙が見られることは報告されていたが（和田・吉田，2015），保育者の「直接観察」によっても，同様の結果が裏付けられた。

キーワード：幼児，泣き，感情発達

Ⅰ．問題と目的

「泣き」は，年齢，性別，文化を超え，人間に普遍的に見られる行動である。寂しい時や苦しい時，我々は涙を流し，時に声を出して泣く。親と離れた時や身体的不快感を感じた時，乳児は声を出して泣くが，この泣き声には養育者の注意を喚起し，養育行動を引き起こす効果がある（陳，1986）。哺乳類の幼若個体も，同様の状況において発声（ディストレス・コール）を示し，この発声が親の注意や養育行動を引き起こす（Newman, 2007）。乳児と動物の幼若個体の泣き（啼き）は，類似した状況で生起し，同じような効果をもたらすだけではなく，音響学的にも共通していることから，人間の泣き声の進化的起源は，動物のディストレス・コールにあると考えられている（Newman, 2007；Gračanin, Bylsma, & Vingerhoets, 2018）。一方，涙を流して泣く反応の進化的起源は明らかではない。涙には，目を潤すための基礎分泌の涙，ゴミや化学物質等の刺激によって分泌される反射性の涙，感情による涙（emotional tear）の3種類がある（Frey & Langseth, 1985）。動物が涙を流したという報告は数多く存在するが，基礎分泌の涙や反射性の涙は多くの動物で見られるため，目から溢れ出た涙が感情によるものか否かの判断は難しい（Murube, 2009）。Frey & Langseth（1985）は，動物が感情による涙を流すことを証明するために，動物の飼い主，獣医，動物の専門家等にそれを裏付ける動画や証言の提供を求めたが，明確な証拠となるような情報を得ることはできなかった。これらのことから，現在の

1) 本研究は，日本心理学会第82回大会（2018年9月27日）で発表したデータを再分析したものである。本研究は，JSPS科研費17K0493「幼児におけるネガティブではない泣きの表出と理解の発達」の助成を受けた。

2) 九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科
wada@klc.ac.jp
3) 九州ルーテル学院大学人文学部人文学科

ところ，感情による涙を流すのは人間だけと考えられている。人間の泣きには「声による泣き」と「感情による涙」の２つの要素があるが，本稿では両者を厳密には区別せず，感情を喚起するような状況において，泣き声を出したり，涙を流す反応全般を「泣き」と呼ぶことにする。

人間の泣きは，どのように発達していくのだろうか。出生直後の新生児は，声による泣きを示すが，感情による涙は流さない（Darwin, 1872; Vingerhoets, 2013）。Darwin（1872）の観察によると，感情による涙が初めて見られたのは生後20日から104日で，初発時期に大きな個人差が見られた。新生児における涙の分泌を測定したRohatgi, Gupta, Mittal, & Faridi（2005）によると，反射性の涙は出生直後（６-12時間）から100%の新生児で一定量分泌されるのに対し，感情による涙が同様の基準に達するのは生後28日であった。このことから，人間が感情による涙を流すようになるのは，涙腺の発達によるものではなく，一定の感情発達の結果によるものであると推察される（中山，2015）。乳児期を過ぎ１～２歳になると，泣き声を出して泣く回数が劇的に減少し，年齢が増すに従って，言葉で自己主張しながら涙を流すようになってくる（Vingerhoets, 2013）。さらに発達が進むと声をほとんど出さず，涙だけ流して泣くことが増え，第二次性徴以降には，通文化的に女性でより多く泣きが観察されるようになる（Vingerhoets, 2013）。

発達に伴う泣きの変化として特筆すべきもう１つの特徴は，泣きの理由が多様化していくことである。中山（2015）によると，新生児では「空腹だから」「おむつが濡れたから」などの身体的・物理的理由による泣きのみが見られるのに対し，生後3ヶ月以降は「甘えたいから」「人見知り」などの対人的理由によって泣く割合が高くなる。乳児期の泣きは空腹・不快・欲求不満のように自己中心的なものであるが，発達に伴って，他者からのネガティブな結果の予期（嘘をついた後で叱られる）や，他者への苦痛に対する共感によっても泣きが生じるようになる（Vingerhoets, Bylsma, & Rottenberg, 2009; Gračanin et al., 2018）。成人においては，ネガティブな感情や状況だけでなく，ポジティブな感情や状況によっても泣きが見られる。最近泣いた理由を成人5,715名に尋ねたところ，喪失（loss: 27％），葛藤（conflict: 19％），苦しみの目撃（witnessing suffering: 16％）などネガティブな理由を挙げた人が多かったが，ポジティブな出来事の目撃（witnessing positive event: 12％）も上位にランクインしていた（Vongerhoets, 2013）。このような泣きの理由の多様化は，様々な感情・認知発達を反映して生じてくると考えられる。

適切な状況で泣きを表出し，不適切な状況で泣きを抑制する能力を発達させることは，その人の社会的適応を高める上で重要な課題である。泣きは諸刃の剣で，どのような状況でどのように泣くかによって，親や仲間からの援助や同情を得られる場合と，嘲りやいじめを引き出してしまう場合（陳，1986; Schwartz, Proctor, & Chien, 2001）がある。また，泣くことによってポジティブな印象（暖かい，共感的，信頼できる等）を持たれる場合と，ネガティブな印象（情緒不安定，無能，弱い等）を持たれる場合がある（Hendriks & Vingerhoets, 2006; Van de Ven, Meijs, & Vingerhoets, 2016; Vingerhoets & Blysma, 2016）。泣きの表出・抑制の適切な発達を援助するには，何歳頃に，どのようなことを目標とすべきなのかという，子どもの定型的な発達に鑑みたアウトラインが必要となる（渡辺，2016）。しかし，泣きの研究の大部分は乳児と成人（大学生以上）を対象にしたものであり，幼児期から成人期に至るまでの泣きの発達過程については明らかにされていない点が多い。例えば，成人においては，ネガティブな要因だけでなく，ポジティブな要因よっても泣きが見られるようになることを先に述べたが，ポジティブな要因による泣きが何歳頃から生じるのかについてすら，正確なデータは見当たらないのが現状であり，泣きの発達についての基礎的な情報の蓄積が求められている。

和田・吉田（2015）は，ネガティブではない感情によって涙が出た（または涙がこみあげた）一番古い記憶について，大学生102名に質問紙で回答を求め，ネガティブではない涙の初発年齢の平均値は12.8歳，最頻値は17歳であること，幼児期（３～６歳）にネガティブではない涙を経験した人が102名中９名（8.8%）存在することを報

告している。ネガティブではない涙が生じた状況については，＜ネガティブ状況解消の喜び・安堵＞と＜苦労が報われた喜び・安堵＞によるものが全体の３分の２を占めており，ストレスや緊張を引き起こす「泣きたくなる」ような状況が生じ，他者の援助や自分自身の努力によってその状況が解消・改善するという点が共通していた。このことから，和田・吉田（2015）は，ネガティブではない泣きは，ネガティブ状況が解消・改善し，泣きの抑制が解除されることによって生じるものであり，発達過程におけるネガティブではない泣きの出現は，泣きを抑制する能力の発達を反映したものである可能性を示唆している。

しかし，和田・吉田（2015）のデータは大学生の回想に基づくものであるため，幼少期のエピソードに関しては，事後的な解釈によって記憶のゆがみが生じている可能性も否定できない。そこで，(1) ネガティブではない泣きは幼児において実際に観察されるのか，(2) 観察されるとすれば，どのような状況で生起するのかについて，より正確なデータを得るために，現役の保育者を対象に「幼児においてネガティブではない泣きを直接観察した経験とその具体的なエピソード」についての質問紙調査を実施した。

Ⅱ．方　法

１．調査方法と調査対象者

現役の保育者に対し，201X 年３月～7 月にかけて質問紙調査を実施した。熊本県内３箇所の保育所及び認定こども園において質問紙の配布と回収を依頼したほか，幼稚園，保育所，認定こども園に勤務している本学卒業生･本学大学院修了生･及びその知人に，郵送または手渡しで質問紙への回答を依頼した。質問紙への回答が得られたのは 76 名であった。保育者としての勤続年数の回答が得られたのはうち 59 名で，平均 6.8 年（$SD = 7.0$），範囲は １～30 年，中央値は４年であった。

２．調査内容

「ネガティブではない泣き」についてのイメージが湧きにくいと考えられたため，フェイスシートにおいて，①幼児期の「泣き」は，苦痛や欲求不満などネガティブな感情によるものが大部分だが，発達に伴い喜びや感動などのポジティブな感情や，ネガティブとポジティブが入り混じった複雑な感情によっても「泣き」が見られるようになること，②大学生の報告によると，「弟が生まれた時に感動して（３ 歳）」，「一人で道に迷って，家に帰れた時に安心して（4 歳）」など，ネガティブではない泣きを幼児期に経験している人が一定数いること，を説明した上で，以下の質問への回答を求めた。

(1) 保育者としての勤続年数　回答者の保育者としての勤続年数を尋ねた。後半に配布した質問紙では，匿名性をより高めるため，勤続年数の項目を省略した。

(2) 幼児のネガティブではない泣きの観察経験　ネガティブではないと思われる状況での泣きを直接観察した経験（テレビで見た事例等は含めない）の有無について，ある・ないで回答を求めた。ポジティブな理由による泣きだけでなく，ネガティブとはっきり言いきれない泣き，理由がよくわからない泣きを観察したことがある場合も，「ある」と回答するよう教示した。この質問に「ない」と回答した場合は，ここで回答終了とした。

(3) 幼児のネガティブではない泣きのエピソードの詳細　幼児のネガティブではない泣きを観察した状況について，思い出せるものすべてをできるだけ詳しく記述し，その時の幼児の性別・年齢について回答するよう求めた。また，記述してもらったエピソードをそのまま公開する可能性があることを伝えた上で，各エピソードの公開の可否についても回答を求めた。

３．倫理的配慮

匿名性を確保するため，質問紙は無記名・封入で回収した。本来，調査への依頼文において，倫理的配慮についての詳細な説明を加えるべきであるが，依頼文の長文化による回答者の負担増が危惧されたこと，匿名性の高い調査で調査協力の自由が保証できると考えられたことから，調査の目的と調査への協力が任意であることを示す文言を加えるに留めた。

Ⅲ．結　果

１．幼児のネガティブではない泣きの報告数

幼児においてネガティブではない泣きを直接観

察した経験があると回答したのは，現役の保育者76名中51名で，自由記述に記載された泣きのエピソードの件数は82件であった。分析対象をネガティブではない泣きの直接観察事例に絞るため，82件のエピソードの内容を確認し，直接観察ではなく伝聞によるもの1件，泣きが起こった状況がネガティブと判断されたもの13件，詳細不明でネガティブか否かを判断できないもの3件を除外した。また，お別れ会や卒園式における泣きのエピソード32件は，別れの悲しみと不可分と考えられたため，ネガティブではない泣きの分析からは除外した。その結果，ネガティブではない泣きと判断されたエピソードは33件で，ネガティブではない泣きの報告者数は76名中25名(32.9%)，報告者1人あたりのエピソード報告数(平均値±標準偏差)は1.32 ± 0.63件（1～3 件）であった。

2．幼児のネガティブではない泣きの生起状況の分類

ネガティブではない泣きのエピソードは，KJ法（川喜田，1967）を用いて分類した。まず，33件の自由記述エピソードの内容を第一著者が要約した。次に，第一著者と第二著者のそれぞれが，泣きの生起状況の類似性に基づいてエピソードを分類し，小カテゴリーを作成・命名した。さらに小カテゴリーの類似性に基づいて大カテゴリーを作成・命名した。その後，第一著者と第二著者でエピソードの分類について意見交換を行い，分類の妥当性について第三者の意見を聴取した上で，第一著者が分類とカテゴリー名を最終決定した。

表1は，幼児においてネガティブではない泣きが生起した状況の分類結果を示している。33件のエピソードにおける泣きの生起状況は17個の小カテゴリーに分類された。17個中11個の小カテゴリーは3つの大カテゴリーに統合された。以下，小カテゴリー名は【 】，大カテゴリー名は＜ ＞で示している。

1つ目の大カテゴリー＜愛着対象との再会＞は，5つの小カテゴリーから構成され，33件中13件(39.4%）のエピソードがここに分類された。小カテゴリー【親の迎え（入園間もない頃)】は，入園間もない頃，親が迎えにきた瞬間に泣くというエピソード8件，【親の迎え（行事後)】は，キャンプや運動会で不安や緊張を感じながらも楽しく過ごした後，迎えに来た親を見て涙があふれるというエピソード2件，【親の迎え（いつもより早い)】は，いつもより早い時間に親が迎えにきた時に泣き出したエピソード1件，【親の迎え（詳細不明)】は，迎えに来た親を見て突然涙を見せたというエピソード1件，【担任の出勤（入園間もない頃)】は，入園間もない時期に早朝保育で預けられていた時，出勤してきた担任の足元に抱きついて泣いたエピソード1件であった。これらはすべて，愛着対象である親や担任が自分の前に再び現れた時に泣く，という点で共通していた。

2つ目の大カテゴリー＜成功・勝利＞は，4つの小カテゴリーから構成され，11件（33.3%）のエピソードがここに分類された。【成功（自分）＋ほめられる】は，自分自身の成功体験（運動会で上手に演技できたり，できなかった鉄棒ができるようになったり）の後，親や保育者にほめられた時に泣くというエピソード6件,【勝利（自分)】は，運動会のかけっこ，クラス対抗リレー，サッカー大会などで自分自身または自分のチームがライバルに勝利した時に泣くというエピソード3件,【成功（自分)】は，厳しい練習を乗り越え，発表会で劇も合奏も大成功を終えた時に泣いたエピソード1件，【成功（他者)】は，障がいのある子が，発表会のセリフを言えた時に，同じクラスの子が泣いたエピソード1件であった。これらは，苦労を乗り越えて自分または他者が勝利・成功した時に泣く，という点で共通していた。

3つ目の大カテゴリー＜危機からの解放＞は2つの小カテゴリーから構成され，3件のエピソードがここに分類された。【危機からの解放(自分)】はトラブルや危機的な状況から自分自身が解放された時に泣くというエピソード2件，【危機からの解放（他者)】はアニメの主人公が危機にあい，助けられた時に「よかった」と言って泣くというエピソード1件で，自分または他者が危機的な状況から解放された時に泣く，という点で共通していた。

ネガティブではない泣きのエピソードの81.8%(33件中27件）が，上記3つの大カテゴリーに分類されたが，6件のエピソード（小カテゴリー）は大カテゴリーに統合できなかった。統合できな

表１　幼児におけるネガティブではない泣きのエピソードの分類結果

大カテゴリー 件数（男：女）	小カテゴリー	件数（男：女）	年齢別人数（男児数） 3歳未満	年少	年中	年長	記載無	エピソード例（要約）
＜愛着対象との再会＞ 13 (2 : 12)	【親の迎え（入園間もない頃）】	8　(2 : 6)	4 (1)	4 (1)	0	0	0	入園間もない頃、母親が迎えに来て。
	【親の迎え（行事後）】	2　(0 : 2)	0	1	0	1	0	お泊りキャンプが終わり、1日ぶりにあった母親の姿を見て。
	【親の迎え（いつもより早い）】	1　(0 : 1)	0	1	0	0	0	母親がいつもより早く迎えに来た時。
	【親の迎え（詳細不明）】	1　(0 : 2)	1	1	0	0	0	迎えに来た親を見て。
	【担任の出勤（入園間もない頃）】	1　(0 : 1)	0	1	0	0	0	早朝保育で、担任が出勤してきたら担任の足元に抱きついて。
＜成功・勝利＞ 11（5 : 10)	【成功（自分）＋ほめられる】	6　(3 : 6)	0	1	3 (1)	5 (2)	0	運動会の演技が上手にでき、保護者から「上手だったね」ほめられて。
	【勝利（自分）】	3　(2 : 2)	0	1	0	3 (2)	0	運動会のかけっこで一生懸命練習し、いつも負けている子に勝つことができた時。
	【成功（自分）】	1　(0 : 1)	0	0	0	1	0	厳しい練習を乗り越え、発表会で劇も合奏も大成功で終えた時。
	【成功（他者）】	1　(0 : 1)	0	0	0	1	0	同じクラスの障がいをもった子が、発表会のセリフを言えた時。
＜危機からの解放＞ 3 (0 : 3)	【危機からの解放（自分）】	2　(0 : 2)	0	0	2	0	0	イベントで、力を合わせて敵を追い払った後。
	【危機からの解放（他者）】	1　(0 : 1)	0	0	0	0	1	アニメで主人公が危機にあい、助けられた時に「よかった」と言って。
＜その他＞ 6 (4 : 2)	【辛い出来事の後の優しい声かけ】	1　(0 : 1)	1	0	0	0	0	転んで泣いて泣きやんだ後、先生に優しい声をかけられて。
	【出産】	1　(1 : 0)	0	1 (1)	0	0	0	テレビで、牛の赤ちゃんが生まれてきた場面を見て。
	【憧れの存在との対面】	1　(0 : 1)	0	0	0	1	0	クリスマス会でサンタさんに会えて。
	【笑いすぎ】	1　(1 : 0)	0	0	1 (1)	0	0	笑いすぎて。
	【成功（自分）＋ほめられる】 ＋【親の迎え（行事後）】	1　(1 : 0)	0	0	1 (1)	0	0	運動会の最後に、こども1人ひとりにメダルを渡している時、近くにいた母親に抱きついて（泣きの理由をきくと「楽しかった」）。
	【人からの注目・緊張】 ＋【願っていたことが叶う】	1　(1 : 0)	0	1 (1)	0	0	0	待ちに待った保育園の誕生会で、自分のお誕生日をお祝いをされた時（「みんながお祝いしてくれるのが恥ずかしくて嬉しい」）
合　計		33　(11 : 27)	6	12	7	12	1	

注）全エピソード件数より，性別，年齢別の合計件数が多くなっている箇所があるが，これは１件のエピソードに両方の性別または複数の年齢が記載されていた場合，男女両方，複数の年齢で二重にカウントしたためである。

かったのは，泣き止んだ後に優しい声をかけられて泣いた【辛い出来事の後の優しい声かけ】１件，テレビで牛の出産シーンを見て泣いた【出産】１件，クリスマス会でサンタさんに会えて泣いた【憧れの存在との対面】１件，笑いすぎて泣いた【笑いすぎ】１件，２つ以上の複合要因によって泣いた

エピソード２件で，あわせて６件であった。

３．幼児におけるネガティブではない泣きの性差と年齢差

幼児におけるネガティブではない泣きの全エピソードの33件のうち，男児に関するものは11件，女児に関するものは27件で二項検定（両側検定）の結果，女児の件数が有意に多かった（$p < .05$）（表1）。男女のエピソードの合計件数（38件）が，全エピソード件数（33件）よりも多くなっているのは，１件のエピソードに男女両方の性別（または複数の年齢）が記載されていた場合，男１，女１として二重にカウントしたためである。カテゴリー別の性差については，エピソード件数が10以上の＜愛着対象との再会＞＜成功・勝利＞でのみ二項検定（両側検定）を行った。＜愛着対象との再会＞のエピソードの報告件数は男児２件，女児12件，＜成功・勝利＞は男児５件，女児10件でいずれも女児の件数が多かったが，性差が有意であったのは＜愛着対象との再会＞のみであった（$p < .05$）。

図１は，＜愛着対象との再会＞＜成功・勝利＞のエピソード件数を性別・年齢別に示したものである。データ数が少ないため，性別・年齢別の統計検定は行っていないが，＜愛着対象との再会＞＜成功・勝利＞のエピソード件数は，いずれの年齢においても男児より女児で多かった。また，年齢によって，ネガティブではない泣きの出現パターンが異なっており，＜愛着対象との再会＞のエピソードが３歳未満と年少で多かったのに対し，＜成功・勝利＞の報告は年長で多かった。

４．卒園式における泣きのエピソードの分類及びその性差と年齢差

自由記述の回答から，お別れ会や卒園式における泣きのエピソード32件が得られた。これらの泣きは，式の演出や歌への感動，発表の成功等，ネガティブではない要素も含んでいるが，保育者やお友達との別れの寂しさ･悲しさ等の，ネガティブな要素とも不可分と考えられたため，ネガティブではない泣きには含めず，別途分析を行った。

表２は，お別れ会や卒園式における泣きのエピ

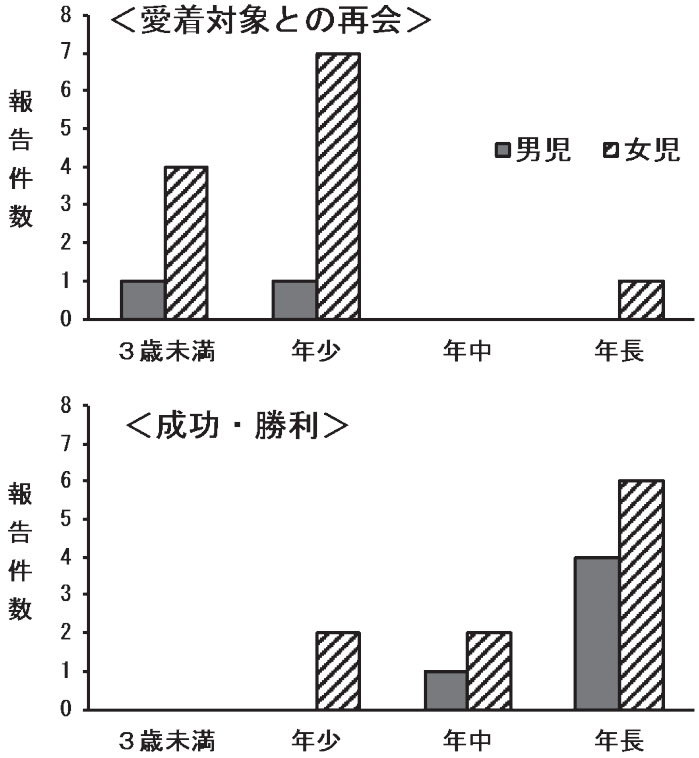

図１　ネガティブではない泣きのエピソードの性別・年齢別報告件数

表２　お別れ会・卒園式における幼児の泣きのエピソードの分類結果

小カテゴリー	件数	（男：女：不明）	年齢別人数（男児数）					エピソード例（要約）
			３歳未満	年少	年中	年長	不明	
【歌やスピーチの披露中】	11	（5：8：1）	0	0	1 (1)	12 (4)	1	卒園式で卒園のうたを歌っている時。
【もらい泣き（歌やスピーチ中）】	4	（1：2：1）	0	0	1	3 (1)	0	卒園式後の謝恩会で、親への感謝の手紙を読んでいる時に、親の涙を見て。
【もらい泣き（詳細不明）】	4	（0：5：0）	1	0	2	2	0	卒園式中、担任の先生が涙する姿を見て。
【歌やスピーチの鑑賞中】	3	（0：4：0）	0	2	1	1	0	卒園式日のお別れ会で、お別れの言葉や歌を聞いて。
【回想】	1	（0：1：0）	0	0	1	0	0	卒園式前のお別れ会で、今までの楽しかった思い出をみんなで語り合っている時。
【詳細状況不明】	9	（3：7：0）	0	3 (2)	2	5 (1)	0	卒園式の時にお別れが悲しくて。
合　計	32	（9：27：2）	1	5	8	23	1	

注）全エピソード件数より，性別，年齢別の合計件数が多くなっている箇所があるが，これは１件のエピソードに両方の性別または複数の年齢が記載されていた場合，男女両方，複数の年齢で二重にカウントしたためである。

ソードを，ネガティブではない泣きと同様の方法によって分類した結果を示している。32 件のエピソードは６個の小カテゴリーに分類された。最も多かったのは，自分たちの【歌やスピーチの披露中】に泣くエピソード（11 件）で，次に多かったのは，歌やスピーチの披露中に保護者・保育者や他の園児が泣くのを見た時の【もらい泣き（歌やスピーチ中)】（４ 件），詳細状況が不明の【もらい泣き（詳細不明)】（４ 件）であった。年長児等の【歌やスピーチの鑑賞中】（３ 件）や，お別れ会における過去の楽しかった思い出の【回想】（１件）でも泣きが見られた。詳細な状況が不明のものは【詳細状況不明】（９ 件）としてまとめた。

性差について見ると，お別れ会・卒園式における泣き 32 件のうち，男児に関するものは９件，女児に関するものは 27 件で，二項検定（両側検定）の結果，女児の件数が有意に多かった（$p < .01$）。エピソード件数が 10 以上の【歌やスピーチの披露中】でのみ二項検定（両側検定）を行った結果，男児５件，女児８件で性差は有意ではなかった。しかし，いずれの小カテゴリーについても，男児より女児の件数が多く，【歌やスピーチの鑑賞中】の泣きや，【もらい泣き（歌やスピーチ中)】【回想】による泣きは女児での報告のみであった。卒園式のエピソードが大部分ということもあり，年齢別で見ると年長児での報告が最も多かったが，３歳未満児や年少児においても，【もらい泣き（詳細不明)】【歌やスピーチの鑑賞中】の泣きの報告があった。

Ⅳ．考　察

保育者を対象に幼児の泣きに関する調査を行った結果，保育者の３人に１人（32.9%）が，ネガティブではない泣きを幼児で直接観察した経験を持つ

ことが明らかとなった。幼児期においてもネガティブではない涙が見られることは，和田・吉田（2015）がすでに報告しているが，この調査は大学生自身の幼少期の回想に基づくものであり，記憶の歪みを含む可能性があった。保育者による「直接観察」でも同様の報告が得られたことにより，ネガティブではない泣きが幼児期から見られることを確証できたといえる。

今回，保育者としての勤続年数の情報は76名中59名からしか収集できなかったが，勤続年数の平均は6.8年で，59名全員が1年以上の保育者としての経験を持っていた。それにも関わらず，保育者の3人に1人からしか報告が得られなかったことから，幼児におけるネガティブではない泣きは，保育者なら誰でも観察経験があるというほど一般的な現象ではないと考えられる。実際，和田・吉田（2015）において，幼児期にネガティブではない涙を経験したと回答したのは大学生の一部（8.8%）であった。また，観察経験ありと回答した保育者において，1人あたりのエピソードの報告件数が平均1.3件に留まっていたことも，ネガティブではない泣きがごく一部の幼児で観察される現象であることを示唆している。

ネガティブではない泣きの生起状況に基づいてエピソードを分類した結果，エピソードの8割以上は，3つの大カテゴリー＜愛着対象との再会＞＜成功・勝利＞＜危機からの解放＞のいずれかに属するものであった。保育者への調査から得られたエピソードと，和田・吉田（2015）が大学生の回想に基づいて得たネガティブではない泣きの一番古い記憶と比較すると，本研究の＜愛着対象との再会＞と＜危機からの解放＞は，和田・吉田（2015）の「ネガティブ状況解消の喜び･安堵」と，＜成功・勝利＞は「苦労が報われた喜び・安堵」とほぼ対応していた。和田・吉田（2015）の「音楽やパフォーマンス」による泣きは，今回ネガティブではない泣きの分析対象となったエピソードには含まれなかったが，卒園式のエピソードの中に現れていた。大学生のネガティブではない泣きの初発エピソードは平均12.8歳時，3～20歳のものであったが，このうち幼児で見られなかったエピソードは，「懐かしい人との思わぬ再会」のみであった。このことから，ネガティブではない泣きの初発となるようなエピソードは，幼児の段階でほぼ全て出現すると考えられる。

泣きには，助けが必要な状態であることを他者に伝え（Provine et al., 2009），他者からの援助を引き起す効果があると考えられている。親と離れ離れになったり，勝負で敗北したり，危機やトラブルに巻き込まれるなどのネガティブな状況で泣くことは，他者からの援助や慰めを引き出す上で一定の効果があると考えられる。一方，親が迎えにきたり，成功・勝利したり，危機から解放される場面は，どちらかというとポジティブで，助けや援助が不要になった状態である。発達に伴い，このようにネガティブではない状況において泣きが見られるようになるのはなぜだろうか。和田・吉田（2015）は，ネガティブではない泣きのエピソードには，「泣きたくなる」ようなストレス・緊張状況が事前に存在することを指摘し，ネガティブではない泣きが，ストレス状況で泣きの抑制の発達と関連して生じてくる可能性を示唆している。すなわち，ネガティブではない泣きは，ストレス状況が解消し，泣きの抑制が解除された反動によって生じるというのである。Solter（1995）も，幼児の涙には，欲求充足や不快感の軽減後，恒常状態に戻ろうとする過程で，副交感神経の刺激によって生じる場合があるとの考えを示している（cf. Luts, 1999）。このような考えに基づけば，ネガティブではない涙・泣きは，泣きの抑制の解除や，交感神経系興奮の解除によって反射的に生じる副産物であり，ネガティブな泣きのような対人的・社会的機能を持たない可能性も考えられる。

一方，泣きの対人的・社会的機能として，愛着形成を重視する立場もある（Bowlby, 1969）。親と離れた時，動物や乳児は声を出して泣く（啼く）が，動物のディストレス・コールは親と再会すればすぐ止まるのに対し，乳児の泣きは親と再会してもしばらく続く（Zeifman, 2001）。また乳児は，苦痛・不快がほとんどなく，助けや援助が不要と思われる状況において，情動コミュニケーションが主目的と思われる「甘え泣き」を示す（中山，2015）。これらのことから，泣きは他者からの援助が必要ではない場面においても起こり，泣きを通じて愛着対象とコミュニケーションをとることによって，自分との絆を深める機能があると考え

られる。成人において泣きが起こりやすいのは，恋人や家族など親密な人がいる場面であるという事実も（Vingerhoets, 2013），泣きが愛着形成に関連するという考えを指示している（Gračanin et al., 2018）。本研究において，保育者から得られた幼児のネガティブではない泣きのエピソードの多くも，親や保育者の前で起こっていた。特に，＜成功・勝利＞による泣きのうち 11 件中 6 件が，親や保育者に成功をほめられた時に起こっていたことは注目に値する。これらの泣きは，ストレス状況が解消し，泣きの抑制が解除された反動によって生じるものかもしれないが，泣きを通じて自分の深い感情を親密な他者と分かち合うことよって，お互いの絆を深める効果が生じている可能性も考えられる。ネガティブではない泣きが，絆を深めるという対人的・社会的機能を持ち得るか否かについては，今後，実証的な検討が必要であろう。

ネガティブではない泣きのエピソードを男女で比較すると，エピソードの報告件数は男児より女児で有意に多かった。また，お別れ会・卒園式での泣きの件数も，男児より女児で有意に多かった。男性より女性で泣きがよく観察されるという現象は，国や文化を超え一貫して見られるが，このような性差が現れるのは 8 ～13 歳以降であると考えられている（Vingerhoets, 2013）。Landreth（1941）は，2 歳半～5 歳の幼児では，女児より男児の方がよく泣くこと，女児は怪我や痛みで泣くことが多いが，男児は大人との諍いや，おもちゃの取り扱い等で生じる欲求不満で泣くことが多いことを報告している。幼児期における泣きの頻度全体は男児の方が多いにもかかわらず，ネガティブではない泣きが女児でより多く観察されるのだとすれば，泣きの性差の発達を検討する上で非常に興味深い。ただし，成人において男性より女性で泣きがよく観察されることにより，女児の泣きのエピソードの方が印象に残りやすかった可能性や，保育所の在園児の男女比が偏っていた可能性，特定の女児が複数のエピソードに登場している可能性もあり，幼児におけるネガティブではない泣きの性差については，別の方法で改めて検討する必要がある。

幼児でネガティブではない泣きの観察経験を持つのは，保育者の 3 人に 1 人であったことから，幼児期にネガティブではない泣きを示すのは幼児の一部であると考えられる。しかし，今回の調査において，「ネガティブではない泣き」がどのようなものを指すのかがわからないとの回答もあったため，具体的な泣きの状況等を指定した上で調査を行うことにより，観察経験有りの割合が大きく上昇する可能性がある。また，本研究では，ネガティブな泣きか否かの判断を泣きが生起した状況に基づいて行った。例えば「園に親が迎えに来る」状況はネガティブではないと判断したが，もっと遊びたい子どもにとって「親が迎えに来る」状況はネガティブであったかもしれない。その泣きがネガティブか否かを正確に判断するには，泣きが生起する前の状況をより詳細に把握する必要がある。さらに今回の調査では，何％程度の幼児がネガティブではない泣きを示すのか，年齢が増すに従ってその割合がどのように変化していくのか，実際に性差が見られるのかは明らかとなっていない。ネガティブではない泣きを示す幼児と，示さない幼児の違いも不明である。ネガティブではない泣きは様々な感情や認知の発達と関連して生じると考えられることから，今後はその個人差と関連する要因の解明が必要である。

謝　辞

ご多用にも関わらず，質問紙の配布・回収・回答にご協力いただいた保育者の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

Bowlby, J.（1969）. *Attachment and loss*（Vol. 1）. New York: Basic Books.

陳省仁（1986）. 新生児・乳児の「泣き」について：初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味　北海道大學教育學部紀要, **48**, 187-206.

Darwin, C.（1872）. *The expression of emotions in animals and man*. New York: Oxford University Press
（ダーウィン，C. 浜中浜太郎（訳）(1931). 人及び動物の表情について　岩波文庫）

Frey, W. H. & Langseth, M.（1985）. *Crying: the mystery of tears*. Minneapolis, MN : Winston

Press.
（フレイ，W. H. & ランセンス，M. 石井清子（訳）(1990)．涙　人はなぜ泣くのか　日本教文社）

Gračanin, A., Bylsma, L. M., & Vingerhoets, A. J. J. M.（2018）. Why only humans shed emotional tears: Evolutionary and cultural perspectives. *Human Nature*, **29**, 104–113.

Hendriks, M. C. P., & Vingerhoets, A. J. J. M.（2006）. Social messages of crying faces: Their influence on anticipated person perception, emotional and behavioral responses. *Cognition and Emotion*, **20**, 878–886.

川喜田二郎（1967）．発想法―創造性開発のために　中央公論社

Landreth, C.（1941）. Factors associated with crying in young children in the nursery school and the home. *Child Development*, **12**, 81–97.

Lutz, T.（1999）. *Crying: The National and cultural history of tears*. New York : Melanie Jackson Agency
（ルッツ，T. 別宮貞徳・藤田美砂子・栗山節子（訳）(2003）人はなぜ泣き，なぜ泣きやむのか？―涙の百科全書　八坂書房）

Murube, J.（2009）. Tear apparatus of animals: Do they weep? *The Ocular Surface*, **7**, 121–127.

中山博子（2015）．乳児期における泣きの縦断的研究―コミュニケーションの観点から―　聖心女子大学大学院文学研究科・人間科学専攻　博士学位論文

Newman, J.D.（2007）. Neural circuits underlying crying and cry responding in mammals. *Behavioral Brain Research*, **182**, 155–165.

Provine, R. R., Krosnowski, K. A., & Brocato, N. W.（2009）. Tearing: Breakthrough in human emotional signaling. *Evolutionary Psychology*, **7**, 52–56.

Rohatgi, J., Gupta, V.P., Mittal, S., and Faridi, M.M.A.（2005）. Onset and pattern of tear secretions in full-term neonates, *Orbit*, **24**, 231–238.

Schwartz, D., Proctor, L.J., and Chien, D. H.（2001）. The aggressive victim of bullying: Emotional and behavioral dysregulation as a pathway to victimization by peers. In: J. Juvonen and S. Graham（Eds）*Peer harassment in school: The plight of the vulnerable and victimized*. New York : Guilford. pp. 147–74.

Solter, A.（1995）. Why do babies cry? *Pre- and Peri-Natal Psychology Journal*, **10**, 21–43.

Van de Ven, N., Meijs, M., & Vingerhoets, A. J. J. M.（2016）. What emotional tears convey: Tearful individuals are seen as warmer, but also as less competent. *British Journal of Social Psychology*, **56**, 146–160.

Vingerhoets, A. J. J. M.（2013）. *Why only humans weep: Unravelling the mysteries of tears*. Oxford : Oxford University Press.

Vingerhoets, A. J. J. M., Bylsma, L. M., & Rottenberg, J.（2009）. Crying: A biopsychosocial phenomenon. In T. Fögen（Ed）, *Tears in the Graeco-Roman world*. Berlin, Boston: De Gruyter. pp.439–475.

Vingerhoets, A. J. J. M., & Bylsma, L. M.（2016）. The riddle of human emotional crying: A challenge for emotion researchers. *Emotion Review*, **8**, 207–217.

和田由美子・吉田ゆう美（2015）．ネガティブではない感情に伴う涙は，何歳頃，どのような状況で生じるのか　―大学生を対象とした回想法による質問紙調査から―　*VISIO*, **45**, 1–9.

渡辺弥生（2016）．児童の感情リテラシーは教育しうるか―発達のアウトラインと支援のありかた―　エモーション・スタディーズ，**2**, 16–24.

Zeifman, D.M.（2001）. Developmental aspects of crying: infancy, childhood and beyond. In: A. J. J. M. Vingerhoets, & R. R. Cornelius（Eds）*Adult crying: A biobehavioral perspective*. Hove, UK: Brunner-Routledge. pp.37–53.

（受稿：2月12日，受理：3月31日）

Classification of crying episodes in pre-school children in non-negative situations: A questionnaire survey for nursery and kindergarten teachers

Yumiko WADA・Miyo IZAKI

This paper aims to clarify if some pre-school children cry in non-negative situations. A questionnaire survey was used to obtain information from nursery and kindergarten teachers about the crying episodes of pre-school children, which they have directly observed before in non-negative situations. A total of 82 crying episodes were described by 76 teachers, but only 33 episodes from 25 of 76 teachers（32.9％）were regarded as non-negative crying. Based on the similarities of crying-eliciting situations, 27 of the 33 episodes（81.8％）of non-negative crying were classified according to KJ methods to the following three categories: “reunion with attachment figure（*n*=13）,” “success/victory（*n*=11）,” and “release from crisis（*n*=3）.” Significantly, more episodes were reported in girls than boys. These results correspond to reports by Wada and Yoshida（2015）that some college students have experienced emotional tears with non-negative emotions at pre-school ages.

Key words: pre-school children, emotional development, crying